



## 馬耳東風

「弘法筆を選ばず」というが、悪筆を自認している私は筆記具にはこだわる方だと思う。筆記具に限らず文房具に興味があるといった方がいいかもしれない。銀座の「I屋」は各階を見て回るだけでも楽しいが、安価で質のいいものを探すのはもっと楽しい。決して高級品を毛嫌いしているわけではない。残念ながら手が届かないだけのことである。この店で買った高級品に、レンズが収納できるようになった携帯用のルーペがある。高級といってもルーペだから大した額ではない。購入当時はこれを使う必要性はまったくなく、見ているうちに欲しくなったので衝動買いしてしまった。当然引き出しの片隅に長い間眠ることになっていたが、今や外出時の必須アイテムの一つとなっている。机の上にはインク瓶のキャップ部分に鉛筆を差し込むようになっている鉛筆削りが置かれているが、これは30年以上前にドイツの街の小さな文具店で見つけたものである。削り屑が瓶に溜まるので手が汚れずとても重宝しており、見た目も洒落ていてたいそう気に入っている。悪筆は細字よりは中～太字のほうがごまかしが利くと感じているので、鉛筆はHBは使わず2B、シャープペンシルの芯は0.7mmである。万年筆は2～3千円のペリカン製を使っている。外観が青一色のペンには青インクを、赤一色には赤インクを入れているがこれも大変満足している。この万年筆の10倍程もする高級ブランドのものも持っているが、私にはこの方が書き心地がいい。筆記具には書き手の実力に応じた相性があるのだろう。

ボールペンはシェーファーの中字を使っていた。これも手になじみ、きれいな字が書けるような気がして10

年ほど愛用していたが、数年前に行方不明になってしまった。いつも上着の内ポケットに入れていたので、背広や替え上着を幾度となく捜したが見つからない。折に触れ、引き出しや、ここかしこを捜していたが見つからず、さすがに諦めていた。それが思いもかけぬところで見つかったのである。

過日、お彼岸の初日の明け方恩師の夢をみた。しばらく墓参に行っていなかったので、早速車で出かけることにした。恩師の霊園は西多摩の圏央道から近いところにある。また恩師の秘書をされていた方で、私が大変お世話になったAさんのお墓が茅ヶ崎のお寺にある。これまで恩師の霊園には車で、Aさんのお墓へは日を改めて電車で行っていた。ところが圏央道が茅ヶ崎まで開通したので、西多摩から茅ヶ崎まで車で簡単に行けるようになった。そこで恩師の墓参のあとAさんのお寺に足を伸ばした。

さてお寺に着き、水を手桶に入れてお墓に行って驚いた。天水受けの横に件のボールペンが置かれていたのである。数年前の前回お参りした際落としたのであろう。その後墓参に来られたご遺族が誰のものかわからないので、目立つ場所に置いてくださったのだろう。大変うれしかったが、一方で、Aさんに「随分お久しぶりね」と皮肉られているように感じ、懐かしさで胸がいっぱいになった。

このボールペンは、クロームメッキされたものだが数年間雨ざらしになっていたので、天水受けと接していた部分が錆びついており、ニッチもサッチも動かない。しかし帰宅して錆を落としたり、メーカー名の刻印が浮かび上がり、さらに芯が取り出せてちゃんと書けたのには驚いた。長生きの余禄というべきか。 (久)